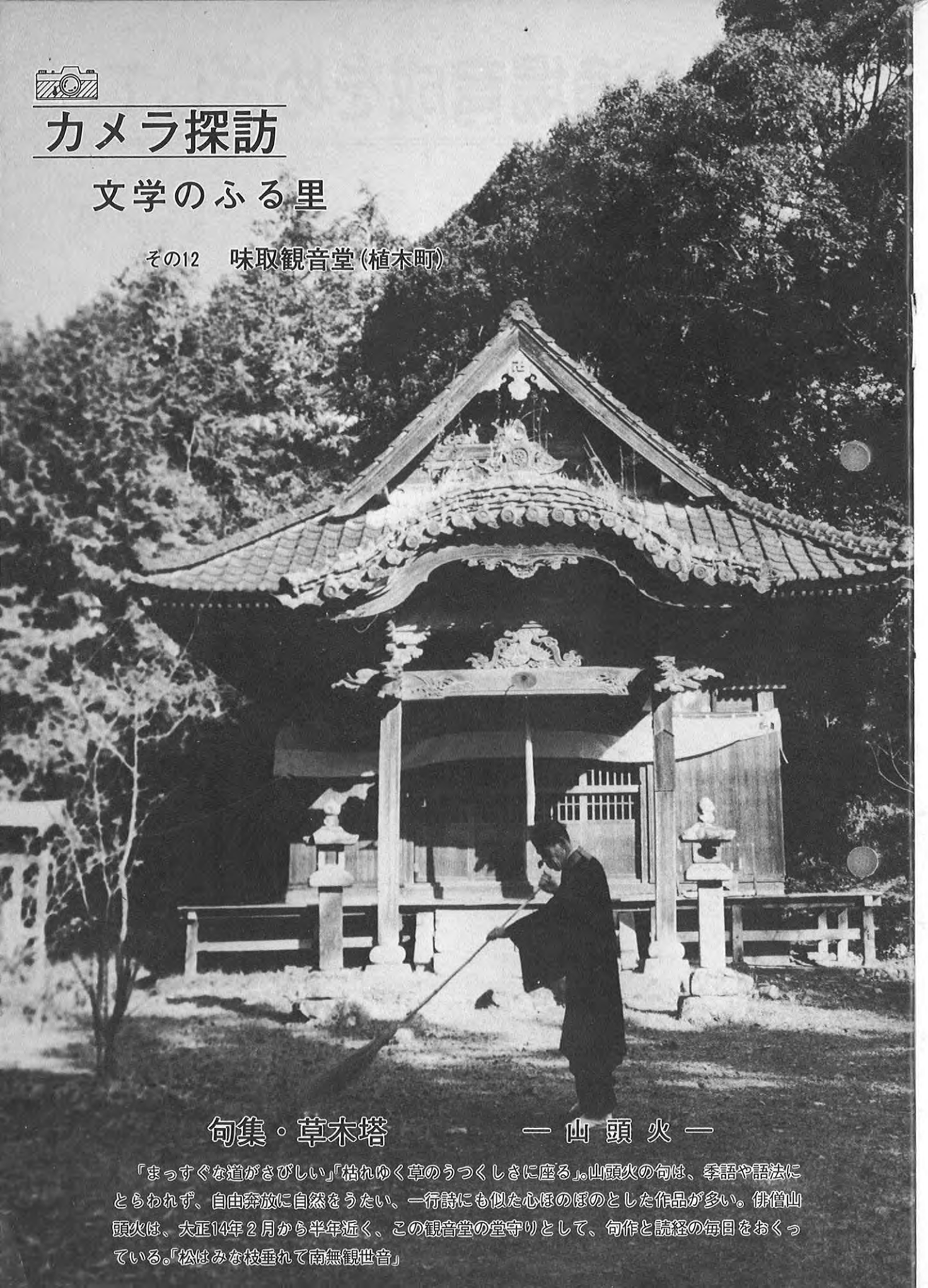
カメラ探訪

文学のふる里

その12　味取観音堂（植木町）



句集・草木塔　―山頭火―

「まっすぐな道がさびしい」「枯れゆく草のうつくしさに座る」。山頭火の句は、季語や語法にとらわれず、自由奔放に自然をうたい、一行詩にも似た心ほのぼのとした作品が多い。俳僧山頭火は、大正14年２月から半年近く、この観音堂の堂守りとして、句作と読経の毎日をおくっている。「松はみな枝垂れて南無観世音」

わたしのぼくの郷

上益城郡矢部町立浜町小学校六年　黒川瑞穂

私の住む町、浜町は、緑の山々に囲まれ、空気がきれいでお米のとってもおいしい所です。また多くの史跡や遺跡を今の時代まで残しつづけています。

そのうちの布田保之助の作った、通潤橋は、浜町の重要な観光地とされ、いつも見物人でにぎあっています。通潤橋は、全国的に有名な石造りの橋で、東京の二重橋を作った肥後の石工橋本勘五郎が保之助にたのまれて造りました。この橋の中には、昔、水が通されて水の行かない白糸の田んぼに水を送っていたそうです。今は、八朔祭の時や観光に来た人の希望で放水されているだけです。

通潤橋が造られた目的は、白糸村という村があり、その村は、千滝川、轟川、笹原川の三本の川に囲まれていながら、川は谷深く孤島のようで水がなく水田が開かれず畑の作物も殆んどできない状態だったので、保之助は、谷をこえたむこうの村から水を渡して白糸村にもお米を作らせたいとの願いからです。

浜町は、多くの部落の集まりです。部落といってもなかなかのにぎあいで商店街のならぶ町です。昼などは車がビュンビュン通ります。しかし家はだんだんたてかえられ、田は年々少しずつへっているようです。

私の通っている浜町小学校は百年という歴史を持っています。以前、国民学校といわれた時代は、千人をこす生徒でいっぱいで、理科室や音楽室などの特別室は、全部教室だったそうですが、今は約五百七十人ぐらいの生徒しかいません。教室もあまっているほどです。

浜町の農民は、野菜や米などを作っています。でも、農業片手につとめに出る人も少なくありません。だんだん都会化してきた浜町、町もすっかり変わって、いなかとは、思えないほどです。しかし人の心の中には史跡や遺跡を大切にする心があると思います。その心を大事にしてもっとよい浜町にしたいと思います。